



Title	渡日延期を経験した留学生在が直面した困難点：待機期間と渡日直後についての語りに焦点を当てて
Author(s)	下村, 朱有美
Citation	日本語・日本文化. 2024, 51, p. 155-181
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95218
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

渡日延期を経験した留学生が直面した困難点

—待機期間と渡日直後についての語りに焦点を当てて—

下村 朱有美

1. 研究の背景

2019 年末に発生した新型コロナウイルスの感染拡大は世界中に大きな影響をもたらした。日々の生活で行動が制限されたことはもちろんのこと、国境を越えて移動する留学生に対しても甚大な影響が生じ、2022 年 2 月 18 日の朝日新聞が「20 年 1 月以降に在留資格の認定を受けながら来日できていない留学生は、約 15 万 2 千人に上る」と報じているように、多くの留学予定者が渡日延期を余儀なくされた。待機を強いられた留学生の中には、長期間の待機期間が発生しただけではなく、留学を断念した留学生もおり、その後の日本語学習やキャリアプラン等、広範囲に渡る影響が懸念される。

筆者自身も新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けた、いわゆるコロナ禍の一時期を海外で過ごし、渡日延期を余儀なくされた日本留学予定者の声を聞く機会があった。留学予定者は先行きが見えない状況に対する不安を抱いただけではなく、メンタルヘルスに不調を来すことや、周囲の留学予定者が留学を断念したことを聞き、自身も留学をキャンセルするかどうか悩むこともあったようである。また、同じコロナ禍を経験して渡日した留学生の中にも、待機期間や渡日直後に経験した困難点が異なっており、一口にコロナ禍の影響と言っても多様であることが感じられた。コロナ禍収束後の留学生への影響を考える上でも、新型コロナウイルス感染拡大の影響を乗り越えて渡日を果たした留学生の語りを質的に分析し、コロナ禍の留学を経験した留学生が経験した困難点やその影響について検討する必要があると強く感じるようになった。

そこで、本稿では新型コロナウイルスの影響を受けて渡日を延期した東欧出身

の留学生 4 名の語りを対象とし、自国での待機期間中、及び渡日直後に直面した困難点に焦点を当て、分析を試みる。

2. 先行研究

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、既に渡日していた日本で過ごす留学生に対するコロナ禍の影響についての研究・調査は多数行われている。渡日が延期になった留学生に関連した調査として、江原他（2021）では 34 大学 41 部局から回答を得た 2020 年の調査より、コロナ禍での留学生受け入れにおいて「入学延期」、「入学後すぐに休学」、「遠隔での入学後オンライン教育の提供」等の対応が取られたと報告している。その中で「留学生は入学した上でオンライン教育を提供されることを希望したケースが多かったということであり、入学延期や休学により学位取得時期が遅くなることを避けようとしたことによると考えられる」（p.48）とし、渡日が延期となっても学位取得に影響が出ないような対応が求められていたことが推測される。さらに、遠隔入学または母国での待機中の留学生に対する教育・研究指導への課題や工夫として、「留学生・教員・事務職員の情報共有」が特に多い課題として、また、工夫としては「遠隔で研究指導（時差考慮など）」、「事務手続きなどの丁寧なケア（SNS の活用）」が多く行われていることが挙げられている。コロナ禍での留学生の受入においては情報共有や事務手続き上のサポートといったコロナ禍前とは異なる対応が求められ、さらにオンラインでの対応を行う上では時差を考慮した対応を要し、特に日本との時差が大きい地域からの留学生について影響が大きかったことが窺われる。

日本語教育機関関係 6 団体（2022）では 2021 年 2 月「コロナ禍の日本留学の扉を開く会」のアンケート調査で得られた「待機留学生の声」から待機留学生には「精神的ダメージ」、「身体的ダメージ」、「経済的ダメージ」があることを指摘している。「精神的ダメージ」では、友人がコロナ禍でも日本以外の国に留学を果たしているのを目にすることによる精神的ダメージが生じたことや、待機留学生自身だけではなく家族も同様に落ち込みを感じていたことが報告されている。さらに、時差がある地域からのオンライン授業参加による「疲れ」「ストレス」「睡眠リズムの乱れ」といった「身体的ダメージ」、渡日時期が不明であることか

ら職を得ることが困難になり収入源を得られない、また、奨学金が受給できないことなどの「経済的ダメージ」も生じていたことが挙げられている。

岸田他 (2022) は「在外のまま留学生生活を送る学生の声をすくい上げようとする調査研究は見当たらない」(p.76) とし、コロナ禍での金沢大学の留学生を対象としたアンケートの中で「日本国外にとどまる留学生が抱える困難や不安」にも焦点を当てている。未渡日者 97 名から得られた回答から、「遠隔学習で感じる困難」として、「研究設備等がなく実験・研究ができない」、「オンライン授業のコンテンツや学習実感の不足」、「インターネット接続環境・機器にまつわる困難」等が挙げられている。また、「今一番不安なこと」で最も多かったのは「留学できるのか不安」であり、「入試、進学、学業、就職への不安」が続く結果となっていた。さらに、未渡日者の内、25.8% の回答者が渡日の遅れにより「違う国への留学を検討」や「留学を辞め、自国内で進学することを検討」といった、留学計画の変更を検討していたと報告している。日本国外で待機していた留学生は日本に行くことができ、留学生生活を送ることができるのかといった不安に加え、留学後のキャリア形成への影響も不安に感じており、そういった不安に対処する方略として日本留学以外の選択肢を検討していたとも考えられる。

また、佐古 (2022) では 2021 年に京都府内の大学に在籍する日本語学習者を対象にアンケート調査を実施し、「既に日本に入学して遠隔授業を受けている A 群」と「未入学のまま母国から遠隔授業を受けている B 群」に分けて分析を行っている。その結果、B 群の方が「新型コロナの影響で困っていることがある」という回答が多く、「入学に関する不安」「授業に関する不安」が主要素として挙げられている。

日本国外で待機生活を送っていた留学予定者を対象とした研究は数が限られており、質的に分析したものはほとんど見られない。下村 (2023) では 4 名の研究協力者の語りをもとに、TEM (Trajectory Equifinality Model: 複線径路等至性モデル) 図を用い、渡日まで待機期間を過ごした留学予定者はどのように待機期間を過ごしていたのか、入学のめどがつきにくい状況下で待機期間を続ける支えとなっていたものは何かを探った。その結果、待機期間の就学・就労、待機場所について 4 つの類型が得られ、この類型が待機期間の情意面に影響していたことが

明らかとなった。また、4名の研究協力者全員が何らかのメンタルヘルスの不調に陥っていたが、過去の留学経験で形成した日本でのネットワークに加え、留学先のオンライン授業を受け始めたことが待機期間を継続する支えの一つとなっていたと述べた。しかしながら、TEM図での分析においては語りにおいて表出した意識的・顕在的事項においてプロセスを検討することが可能となったものの、無意識的・潜在的事項を詳細に検討する上で限界があった。また、長期留学においては「渡日すること」が目的ではなく、その先にある「留学生活の充実」や「進学・就職に向けてどのように過ごしていったのか」を検討することが必要であると思われる。

3. 分析方法

本稿では東欧出身の4名の留学生に研究協力を依頼し、聞き取りを行った。研究協力者はいずれも予定していた時期に渡日できず、自国での待機期間を経て渡日した長期留学中の留学生である。2022年6月から2023年6月にかけて、個別に1時間程度の半構造化インタビューを対面で実施した。インタビューは研究協力者の日本語との出会いから現在までライフストーリーを聞き取る形式で進め、コロナ禍での留学に関する事項だけではなく、協力者の背景や日本語学習との関わりに関しても幅広く聞き取りが行えるよう留意した。なお、聞き取りに先立ち、書面と口頭にて研究内容について説明し、研究への協力について承諾書へのサインを得た。

以下、表1に研究協力者の概要を示す。便宜上、研究協力者を「A」「B」「C」「D」で示すが、この記号は聞き取りを実施した順や年齢、渡日時期の順等を反映したものではない。

研究協力者	留学時期への影響	待機場所	待機期間の就学・就労	留学プログラム(渡日時点)	これまでの訪日経験
A	渡日時期の延期	実家	自国の大学に在籍	学部留学生	なし
B	渡日時期の延期	実家	就労(フルタイム)	研究生	短期留学(半年、1年)
C	渡日時期の延期	友人宅→実家	就労(アルバイト)	研究生	短期留学(1年、2週間)
D	渡日時期の延期	実家	無職(家族の手伝い)	研究生	短期留学(2か月、2週間)

表 1 研究協力者の概要

本研究では研究協力者 4 名の語りについて大谷 (2019) の SCAT (Steps for Coding and Theorization) を分析手法として用いる。SCAT では 4 段階のコーディングを行い、そのテーマ・構成概念からストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する手続きをとることとなっている。また、1 つだけのケースのデータなどの比較的小さな質的データの分析にも有効であるとされており、4 名の語りを扱う本稿も「比較的小さな質的データ」を扱っていることから、SCAT を採用した。

また、SCAT では言語記録から潜在的な意味を見出し、さらにそこから新たな概念をもとにした構成概念を作り出し、理論化を行うという分析活動が明示的な手続きを経て行われる。したがって、下村 (2023) と比較し、より潜在的な意味を含めた検討が可能になると考えられる。さらに、分析の過程が可視化され、明示的に残され、分析の妥当性確認のための省察が可能となる。

本研究では、研究協力者 4 名の聞き取り内容を文字化し、SCAT の 4 段階のコーディングとストーリーラインの記述を経て理論を得た。内、本稿で焦点を当てる渡日前の自国での待機期間と渡日後に関する理論は合計 97 件であった。

4. 分析

本稿では SCAT を用い、待機期間と渡日後に関して得られた理論をカテゴリーに分類したが、以下では 2 名以上から得られたカテゴリーについて中心に扱うこととする。なお、SCAT で導き出した理論は「普遍的かつ一般的に通用する原理のようなものではなく、『このテキストの分析によって言えること』（大谷 2019: 324）であり、以下の分析も理論の一般化を試みるものではなく、研究協力者の多様性を意識した上で留学生が直面した困難点とその対応を探っていくこととする。

各理論には便宜上、番号を付し、【 】に理論のカテゴリー、[] に研究協力者を示す。また、日本に留学を予定しており、渡日までの期間を過ごしている留学予定者については、渡日前は「待機留学生」「未渡日者」等が用いられることもあるが、以下では渡日前の期間に関する理論についても「留学生」として進める。

4.1. 渡日前

本研究の研究協力者 4 名は日本留学決定後、いずれも渡日時期の延期を経験している。渡日時期の設定について、以下のような理論が得られた。

①【渡日時期の設定】

- ① -1. 新型コロナウイルス感染拡大が始まった時期に留学予定だった留学生は、新型コロナウイルスの影響での渡日の延期によって、渡日直前の出国延期を強いられ、渡日時期・待機期間の不明確さから先行きがわからない状況に置かれることがある。また、自国の出国制限によって延期となった事態に対する悔しさに苛まれる可能性がある。[C]
- ① -2. 渡日後の隔離期間のための資金を準備する必要が生じ、留学生は費用準備のための渡日日程の延期に至ることがある。[D]
- ① -3. 渡日時期が選択できる留学形態では、自ら決めた渡日時期によってもたらされた想定外のメリットが生じることがある。[B]

研究協力者の渡日延期が決まった時期はそれぞれ異なっていたが、先行きがわからない状況に置かれていた点は共通していた。中でも①-1.では渡日直前の出国延期が自国の出国制限によるものであり、他の国から渡航する予定であれば出国への影響が異なったものになったのではないかと悔しさを感じるに至った。また、後述の理論でも触れるが、コロナ禍での渡日を経験した留学生は渡日直後に隔離生活を送る必要があり、そのための費用の準備が渡日時期だけではなく留学生の情意面にも大きな影響を与えていた。一方で、①-3.のように新型コロナウイルスの感染拡大とは全く異なる理由で決定した渡航時期によって、コロナ禍の影響を抑えることができたと捉えられるケースもあった。このようにコロナ禍での留学においては渡日時期の設定が困難点を検討する上で一つの要素として位置づけられる。

渡日時期の延期により、留学生には待機期間が生じるようになった。

②【待機期間の生活】

②-1. 家族のもとで渡日までの期間を過ごした留学生は、オンラインによる就業によってもたらされた家族と過ごせる時間の恩恵を受ける一方、家族と時間を長時間共有することによって引き起こされた家族との離れがたさに苛まれることがある。[B]

②-2. 留学までの期間、それまで長期間一人暮らしをしていた留学生が渡日までの待機場所である実家で過ごすことにより、学業や就労といった役割のなさによる体調の不調を感じることもある。大都市から離れた家族の家では日本語スキルを生かした就労が困難な状況であり、就労の機会のなさによって生じたメンタルヘルスの不調に苛まれる可能性がある。[D]

②-3. 実家以外の場所で隔離生活を送ることになった場合、隔離生活の長期化により、隔離先の友人と友人の家族の気遣いに対する遠慮の気持ちを抱くようになる。[C]

留学生は渡日までの期間、友人宅で出国準備中に発出された自国の外出制限に

より一時期友人宅での待機を余儀なくされた留学生 C 以外は、実家で待機期間を過ごしていた。その背景には渡日までの期間が確定していない中で実家以外に住む場所を確保するのが難しいという事情があり、実家のような待機先が確保できなかった場合は先行きが不透明な状況の中で待機期間を過ごすことが困難になったのではないかと考えられる。

また、待機期間中生活を共にしていた家族や友人に対して抱く心情も様々であったが、② -2. のように長期間一人で生活していた留学生が家族の家で過ごすことがメンタルヘルスの阻害要因となることもあった。このメンタルヘルスの阻害は留学生と家族との関係の悪化によるものではなく、留学生にとって大学を進学してから数年間離れていた実家での生活であり、コロナ禍で外出が制限されている中で閉塞感を感じ、さらに実家で家族の手伝いをしなければならない状況であったことにより、職を得ることが難しかったこともメンタルヘルスに不調を来した要因の一つとなっていた。

待機期間中、留学生がつながりを得ていたのは生活を共にしていた家族や友人だけではない。仕事をしていた留学生は職場で、大学に所属していた留学生は大学で人間関係が構築された他、同じ出身国の日本留学予定者のコミュニティも形成されていた。

③【就業】

③ -1. 自らの言語スキルを活用した新しいアルバイトなどのコロナ禍でも実施可能なオンラインの就業の機会を得ることが留学へのモチベーションを維持する要因となり得る。一方で長時間の労働による疲労により、感情のコントロールの困難さも生じる。[C]

③ -2. 仕事をしながら待機期間を過ごしていた場合、勤務先の人間関係への配慮が、渡日時期を半年遅らせるという渡日待機期間の長期化をもたらし得ることがある。[B]

③ -3. 待機期間中に仕事をしていた留学生は渡日日程の判明により、渡日前の準備としての留学前のコミュニティの離脱に至る。[B]

③ -4. 留学までの期間一時的に職を得ることもあるが、留学生本人が一定

期間後に渡日を見据えて離脱することを前提としていても、離脱時のトラブルによる不満を感じることもある。[C]

今回の研究協力者4名の内、2名が渡日までの待機期間中に職を得ており、③-1.のように就労が留学のモチベーションの維持や感情のコントロールと関係しているケースもあった。また、就労による渡日時期への影響も生じており(③-2.、3.、4.)、勤務先へ配慮した結果待機期間が長期化することや、退職時にトラブルとなることもあった。

④【友人関係】

④-1. 自国の大学での交友関係が交流はありつつも一定の距離感を保った関係にとどまり、不完全な人間関係の構築となることがある。[A]

④-2. 自己主張をすることについてのためらいに加え、状況と感情の共有の困難さが引き起こされ、物理的距離が生じたことによる友人関係の破綻が生じることがある。[A]

留学生Aは待機期間中、大学に在籍していたが、日本留学が決定したことを機に開始した大学卒業手続きが難航し、④-1.のように大学での友人関係も一定の距離感を保った関係にとどまった。また、友人との物理的距離に加え、個人の性格や物理的距離が友人関係の維持に影響を与えていた(④-2.)。

また、留学生は待機期間中、同じ出身国から日本に留学する留学生のコミュニティに参加することもあった。

⑤【留学予定者のコミュニティ】

⑤-1. 同じ国からの日本への留学予定者によって構築されたSNSでの情報共有の場を介し、留学生は背景が類似した人々のネットワークの形成に成功する。同国出身(地方部出身)の渡日予定者と情報交換をし、感情を共有する機会を得る。[D]

⑤-2. 留学生は同じバックグラウンドを有する仲間との情報共有の場とし

での SNS を活用し、同国からの留学予定者とのつながりを得る。日本留学予定者のつながりが連鎖して形成された大きなネットワークは非公式な情報の共有の場となるが、SNS を利用する留学生は共有された情報や他者の発言によって心理的に不安定な状況に置かれることがある。[C]

- ⑤ -3. SNS での情報共有では新型コロナウイルスに関する渡航制限や水際措置などの情報が交わされ、それらの情報が情報源によって異なっていたことから留学生の混乱・不安が強くなることがある。[D]

- ⑤ -4. 留学前の自国での日本留学予定者間の交流に参加しないことがある。
[A]

⑤ -4. のようにコミュニティに参加しなかった留学生もいたが、SNS のコミュニティでは様々な情報が交わされ、参加した留学生は感情を共有する機会を得ることも可能となった（⑤ -1.）。一方で、⑤ -2. や⑤ -3. のようにコミュニティ内で接した多様な情報や発言により、心理的に不安定な状況に陥り、混乱・不安が強まることもあった。留学生は待機期間中、いつ渡日できるのか、渡日のためにどのような準備が必要なのかを不安に感じていたが、日本の受入側等から直接得られるが限定的であったことから、SNS を通して幅広く情報を得ようと試みた。しかし、SNS で得られた情報により、メンタルヘルスが阻害されることもあった。

また、コミュニティで得られた情報に加え、留学生は様々な要因でメンタルヘルスが阻害されていた。

⑥ 【メンタルヘルスの阻害要因】

- ⑥ -1. 新型コロナウイルス感染拡大が始まった直後の事態終息の楽観視は終わりの見えない事態に対するストレスに変化する。留学時期の調整をする中、信頼できる情報源の少なさによって恐怖を感じることもある。

[B]

- ⑥ -2. 留学生は先行渡航者についての情報から、通常の渡日であれば負担する必要のない場面で強いられる金銭的負担が生じる可能性があること

を知り、入国後の金銭的負担についての不平等を強く感じるようになる。

[B]

⑥ -3. 留学生は待機期間中、不確定であった渡日日程に加え、渡日後の隔離期間のための自己負担があるといった渡日に際する不確定要素の多さに心理的負担を感じる。[D]

⑥ -4. 金銭面での自己負担についての突然の情報による落胆と長期間連絡がないことによる孤独感が生じ、複数の要因によって増幅された怒りを感じることもある。[B]

⑥ -5. 留学生は予測できない要因による自己負担の可能性と情報の不足、さらに流動的な状況によって引き起こされた不安のため、不安定な心理状況に長期間置かれることがある。[B]

⑥ -6. オンライン授業の中断による学びの機会の一時的な喪失により、日本留学がキャンセルになることによる徴兵義務の発生や、留学できたとしても渡日後にクラスメイトと大きく開いた差に対応する必要があるという懸念が恐怖と強いストレスにつながり得る。[A]

⑥ -7. オンライン授業の中断や、同じ国から留学を予定していた仲間の日本留学の断念が重なることで、不安定な心理的状況に至ることがある。

[A]

⑥ -8. 実際に日本に入国するまで渡日決定後も日本への渡航がキャンセルになるのではないかという懸念が継続することがある。[A]

⑥ -9. 退職して留学する留学生は金銭的負担についての不安に加え、留学後に戻れる居場所を喪失していることから、留学が実現しなかった場合の心理的ダメージの大きさに対する恐怖を抱くことがある。[B]

待機期間の留学生のメンタルヘルスを阻害する要因の一つとして、1点目に留学に関する情報にまつわる事項が挙げられる。情報の不足と流動的な状況 (⑥ -5.) や情報源の少なさ (⑥ -1.)、長期間連絡がない状況 (⑥ -4.) は留学生に恐怖や怒りといった感情をもたらしただ。また、留学がキャンセルになるのではないか (⑥ -6., 8.) という懸念は、⑥ -6. のような徴兵義務の発生や、⑥ -9. のよう

な心理的ダメージを乗り越えられるかという不安につながった。留学がキャンセルになるのではないかという不安については、⑤で言及したコミュニティから得た情報に加え、⑥-7.のように同じ国から留学を予定していた仲間の留学キャンセルを目の当たりにすることにより、留学のキャンセルはより自身にも起こり得る身近な事態であると捉えることになったとも考えられる。さらに、オンライン授業の中断によるクラスメイトとの学力の開き（⑥-6.）という渡日後の懸念も生じている。

しかしながら、メンタルヘルスの阻害要因についての理論の中で研究協力者から最も強く語られたのは、渡日後の隔離期間のための金銭的な自己負担が発生したことであった。後にこの費用は返還されたケースもあったようであるが、限られた情報の中で過ごした待機期間中に、コロナ禍前の留学であれば必要のない隔離のための費用を負担する可能性があることがわかり、心理的負担を感じていた（⑥-2.、3.、4.）。

研究協力者が直面した阻害要因には差異も見られるものの、このような阻害要因に長期間直面することにより、メンタルヘルスの不調を来すことがあった。それでは、留学生はこのような阻害要因に対し、どのように対処していたのであろうか。

⑦【メンタルヘルスケア】

⑦-1. メンタルヘルスを回復・維持させるために家族との対話や日本語学習の継続といった心理的安定を図るための行動がとられることがある。

[A]

⑦-2. 留学生は待機期間中、大きい買い物をすることや友人と過ごすことによる気持ちの切り替えを図ることがある。[C]

⑦-3. 留学生は待機期間中、隔離先で渡日まで継続した友人との関係性により、外的にもたらされた気分転換の機会を得る可能性がある。[C]

⑦-4. 渡日が確定しない時期のストレス要因の多さによってメンタルヘルスが阻害されると、家族の精神的支えやオンラインで指導を受けた日本の教員の好印象がメンタルヘルスの回復と維持に良好に作用することが

ある。[A]

⑦ -1、2. のように留学生自身がメンタルヘルスの回復・維持のための行動をとることや、家族や友人との交流から気分転換の機会等を得ることがあった (⑦ -1、3.)。また、オンライン授業での日本の教員に対する印象がメンタルヘルスの回復・維持に作用していたというケースも観察された (⑦ -4.)。

さらに、長期間の待機期間中、留学生のモチベーションの維持に寄与していた要素について、以下のような理論が得られた。

⑧ 【モチベーションの維持】

⑧ -1. 待機期間中、留学生は留学を断念し新たなキャリア形成の検討を行うことも可能であるが、周囲の状況に影響された出国を望む強い思いがモチベーションの一因となり得る。[C]

⑧ -2. 渡日までの期間、オンラインで指導を受けた日本の教員の好印象に加え、日本留学後に日本で学べる場があるという期待と努力の決意がモチベーションを維持する上で一定の役割を果たすことがある。[A]

「出国を望む強い思い」(⑧ -1.) やメンタルヘルスの回復・維持にも寄与していた「日本の教員の好印象」、また、日本留学後に日本で学べる場があるという「期待」と、その場で努力をしようという「努力の決意」(⑧ -2.) が日本留学に向けたモチベーションを維持させる上で作用していた。特に留学生 A はこれまでに何度か日本留学の機会を得るために選抜試験を受験しており、漸く日本留学の機会を得ていたことから、上記のような期待と努力の決意がモチベーションを維持させる要因となっていたとも考えられる。

4.2. 渡日後

長期間の待機期間中、数々の困難を乗り越えて渡日を果たした留学生たちは、渡日後もライフラインの確保や日本での学習に関する課題に直面することになった。

⑨【渡日後に生じた課題】

- ⑨-1. 渡日直後の隔離期間後も、これまでの日本留学時とは大きく異なった居住環境が問題点となることがある。[C]
- ⑨-2. 初めての来日に伴うライフライン確保上の多くの困難点は生活上の困難点についての相談の受け皿を活用して乗り越えることができる。サポートを受ける上で、留学生は援助を求めることについてのためらいの気持ちやサポートを受けたことに対する感謝の気持ちを抱くことがある。[A]
- ⑨-3. 留学生は渡日直後の金銭面でのライフライン確保上の困難点があることやライフライン確保に要する時間の長さを渡日後の課題として実感することがある。[A]
- ⑨-4. 濃厚接触者となったことから隔離期間が生じることにより、外出と学習の機会が制限されたことへの不安を抱くことがある。[A]
- ⑨-5. 長期休暇期間中に渡日した留学生は余暇を活用した留学後の心理的・経済的足場づくりができ、自身でコントロールすることによる充足感を得る可能性がある。[B]
- ⑨-6. 渡日直後は特にオンライン授業の履修環境を確保し、生活の環境を整えながら授業に出席する負担が生じ得る。[C]
- ⑨-7. 隔離期間中、オンライン授業に要する機材と機材の活用情報の不足に加え、学習に必要な教材の確保が困難になることがある。[A]
- ⑨-8. 渡日がクラスメイトより遅くなった留学生はオンライン授業の中断による学習の遅れに加え、学習内容の多さへの対応ができないことによる落ち込みを感じることもある。[A]
- ⑨-9. 留学生は渡日後の学習について自身で学習を管理することによる充足感を得、勉強が順調に進んでいるという手ごたえを感じることもある。自身の興味・関心に基づく学習内容の選択ができ、自身でコントロールすることによる充足感を得る可能性がある。[B]

渡日後、これまでの留学経験の有無に関わらず、新たな環境での居住環境やラ

ライフラインの確保が一つの課題となった (⑨ -1.、2.、3.)。この課題に対し、⑨ -5. のように余暇が活用できる場合はライフラインの確保を通し、長期の待機期間を経て入国した直後の不安定な心理状況を安定させることが可能となるケースもあった。また同理論では、自国での待機期間中に情報の制限等によりコントロールが不可能な状況にストレスを感じていたこととは対照的に、入国後は自身で選択できることの多さを実感したことが充足感につながっていたことを示している。一方で、入国後に隔離期間が生じた場合、渡日を果たしたにも関わらず外出と学習の機会が制限されたことを不安に感じることもあった (⑨ -4.)。

⑨ -6. 以降では留学先での学習についての課題が示されている。日本でもオンライン授業を履修することになる場合は履修のために環境を確保する負担が生じ (⑨ -6.)、その間に外出が制限されていた場合は使用する機材や学習教材の確保が困難となることもあった (⑨ -7.)。また、クラスメイトとの学力差や学習内容の多さへの対応が課題となることもある (⑨ -8.) が、留学先のカリキュラムや学習内容によっては、⑨ -9. のように自身でコントロールことによる充足感が得られていた。

上記のような課題に対し、留学生は周囲からのサポートを得ることが可能であった。

⑩ 【周囲からのサポート】

⑩ -1. ライフラインを確保する負担が生じた場合、サポート技術の熟達したチューターからのサポートを得ることで居住環境を整えられることがある。[C]

⑩ -2. 渡日前から継続したチューターとの関係の中で、チューターの励ましによって得られた心理的支援や渡日後のチューターからの具体的な行動を伴うサポートがモチベーションを維持する上で有効に作用することがある。[A]

⑩ -3. 留学生は留学先で日本人と接することが少ない環境にあっても渡日直後から継続的なチューターの支援を受け、生活面での支援を受けるとともに、日本語の使用機会が創出されることがある。[D]

⑩-4. ライフラインの確保におけるチューターのサポートを受けた留学生は自らもチューターとして留学生のサポートにあたることにより、チューターのサポートを受けていた側から、チューターとして留学生のサポートをする側へと立場と視点の転換を経験することがある。またその上で、サポートにあたることができたという達成感を感じることもある。[C]

⑨-2. ではライフラインの確保における「相談の受け皿」についても言及されていたが、その他に留学生が受けられたサポートの多くはチューターによるものであった。居住環境の整備（⑩-1.）や具体的な行動を伴うサポート（⑩-2.）に加え、励まし（⑩-2.）や日本語使用機会の創出（⑩-3.）等、留学生が渡日直後の困難点を乗り越える上で有効であったことが窺われる。また、⑩-4. のように一定期間後に他の留学生のチューターとなることもあった。

こうしてライフラインを確保し、学習上の困難点も解消されつつある中で、留学生はホームシックに陥ることもあった。

⑪【ホームシック】

⑪-1. 留学生は渡日後に SNS で触れた情報によって引き起こされたホームシックを経験することがある。[C]

⑪-2. 留学生はホームシックの不発生の状態が続き、周囲からのホームシックへの配慮が必要とならないことがある。[A]

⑪-2. のようにホームシックにならないこともあったが、今回得られた理論の中では留学生が SNS で触れた情報がホームシックの引き金となっていた（⑪-1.）。ただし、ホームシックの有無に関わらず、自国にいる家族との面会をどのようにして果たせるかとうことを検討しており、この背景には留学生の出身国の国内情勢により帰国が困難であるという状況がある。

⑫【家族との面会】

⑫-1. 国内情勢による帰国の難しさとホームシックの不発生により、家族

への面会は日本で果たしたいという希望を抱く場合がある。[A]

- ⑫-2. 高齢化する家族を心配する気持ちが高まるが、国内情勢に左右される状況に置かれ一時帰国の困難さに直面し、移動が可能な家族との面会の場としての第三国への渡航の道を探ることがある。しかし、家族と第三国での再会が実現したとしても高齢の家族と会うことが難しいという現実と向き合う必要がある。また、自国を離れている大半の友人の存在によって、帰国できたとしても面会できる人は限られている状況である。
- [C]

国内情勢の影響を受け一時帰国が困難な留学生は、日本や第三国での家族との面会の可能性を探っていた (⑫-1、2.)。⑫-1. の場合は留学生自身がホームシックに陥っていなかったということもあり、自国に戻る必要性をあまり感じていなかったが、⑫-2. の場合は自国以外で家族と面会できたとしても、高齢の家族は移動の都合で会うことが難しい状況となる。また、大半の友人は国を離れていることから、一時帰国で会える人が限られている。

国にいる家族との面会の可能性を探る一方、留学生は留学先である日本で人間関係を構築していた。

⑬【人間関係】

- ⑬-1. 留学生は日本人との関係構築において人間関係構築の成功が一部であることを認識した上で幅広いネットワークの形成を試み、人間関係構築・維持のための行動や感情をとることがある。[A]
- ⑬-2. 留学生は多様な人間関係によって得た気づきをこれまでに構築した人間関係による充足感につなげ、多様な人間関係の構築を通じた交友関係の広がりの実感に至ることがある。[A]
- ⑬-3. 渡日後、複数回留学を経験している留学生は過去の留学生活によって関係を構築した仲間との再会による心理的不安の軽減が図られ、周囲の人間に対する肯定的印象を抱き、新たな人間関係の構築に対する意欲的な姿勢を持ち得る。[B]

- ⑬-4. 留学生の渡日後の人間関係の構築において、言語面での知識と実用の差異があることから日本人とコミュニケーションする上での言語の壁を感じることもある。[A]
- ⑬-5. 留学生間の人間関係構築において留学生グループ内での母語使用に対する不満を抱くことがある。出身国・地域が異なる留学生が母語などでやりとりをしていた場合、理解不能な言語でのやりとりへの日本語での介入がためらわれたり、言語使用への不満によって一時的な不和が生じ得る。[A]
- ⑬-6. 出身国が異なる留学生との関係構築を行う中で留学生同士のコミュニケーションに必要な英語レベルの向上が図られ、渡日後のコミュニケーションスキルの向上を感じることもある。[D]

留学生 A から得られた理論⑬-1. 及び⑬-2. では、留学生 A 自身の考えから幅広いネットワークの形成が図られ、交友関係の広がりの実感に至っている。また、これまでに日本留学を複数経験していた留学生は過去の留学生活で得た友人と再会し、さらに新たな人間関係の構築への意欲を抱いていた（⑬-3.）。

一方で日本人との関係構築においてはこれまで学んできた日本語と実際の使用が異なることを感じる（⑬-4.）ことや、留学生間では自身にとって未知の言語が使用されることにより不満を感じる（⑬-5.）場面もあった。一方で、⑬-6. のように留学生同士が意思疎通を図る際に用いられる主な言語が英語であったケースでは、英語力とともにコミュニケーションスキルの向上に至ることもあった。

上記では留学生が日本語や未知の言語の使用に違和感を感じていたケースも見られたが、母語の使用にはどのような側面があるのだろうか。

⑭【母語の使用】

- ⑭-1. 自国の周辺国から来た留学生との関係構築により母語や使用言語を共有するグループが形成されることがある。留学生の関係構築に対する熱意がグループ内の関係を強化する要因となる可能性がある。[C]
- ⑭-2. 留学生が自らのネットワークを生かしコミュニティを形成し、その

コミュニティの醸成を感じることがさらなる関係構築に対する熱意のもととなり得る。[C]

- ⑭-3. 留学生間の交流では、同国出身でメンタルヘルスの不調を抱えているという共通点があり、趣味や研究について共通の話題がある友人とのやりとりの中で、類似した問題点を共有することにより話しやすさを感じることがある。[D]

- ⑭-4. 留学生は母語で書かれたものを必要としない姿勢を示し、母語の使用機会のなさによるストレスの不発生に至ることがある。家族とのやりとりの際の母語使用で母語使用の欲求は満たされており、留学先での母語話者との交流の必要性のなさを感じ、自国の言語・文化と距離感を保つ姿勢をとり得る。[A]

⑭-1.、及び⑭-2. では母語や使用言語を共有するグループが形成され、コミュニティの醸成を感じ（⑭-2.）、留学生自身が関係構築に対する熱意（⑭-1.）を抱いていた。また、母語に加え、その他の面でも共通点のある友人を得ることにより、悩みを共有でき、話しやすいという感情を抱くこともあった（⑭-3.）。一方で、留学生 A のように母語使用については自国にいる家族とのやりとりの際に用いる範囲で満足し、日本では自国の言語・文化と距離感を保つこともある（⑭-4.）。特に留学生 A はコロナ禍での日本留学が初めての渡日であり、日本に留学するからには可能な限り日本語を用いたいという思いがあったことが背景の一つとして考えられ、この背景が⑬-5. のような日本での日本語以外の言語使用についての意識に結びついたとも考えられる。

母語の使用については、使用する言語が共有できるという安心感があることに加え、「日本人のいない場」として日本で感じるストレスを分かち合う場ともなっていた。

⑮ 【日本で感じるストレス】

- ⑮-1. 留学生の自国や周辺国と日本との差異に起因する、卒業後の進路を左右する重要な場面である就職活動のありかたに対する不満や、新型コ

コロナウイルスの感染拡大対策の日本の要請に対する疑問と不満、日本の細かさに対するいらだちを感じることもある。[C]

- ⑮-2. 指導教員との対面時に自身の日本語レベルの不足によって生じる緊張が体調管理を困難にするストレスの要因となり得る。[D]

⑮のようなストレスについて母語を使用するコミュニティで発露することにより、メンタルヘルスの維持や回復が図られていたと考えられる。⑮-1.の理論では就職活動について言及されているが、これは今回研究に協力を得た4名全員が日本に長期留学していることも関連している。短期留学では留学期間終了後に在籍する場所が確保されていることが多いが、長期留学では渡日前に学校や仕事先といったコミュニティを離脱しており、日本での留学期間終了後のキャリアをどう形成するかが課題となる。

⑯ 【キャリア形成】

- ⑯-1. 長期留学では留学期間終了後のキャリア選択の自由がある一方、帰還するコミュニティが不在であるという現実がある。自身の心理的習熟により長期的視野の獲得に至った留學生は自身の選択が求められる立場での目的意識の重要性を認識することがある。[B]

- ⑯-2. 留学制度上、修学年数に制約があり、就職のための帰国の可能性が国内情勢の影響を受けて限られていることから、卒業後は進学を優先するキャリアプランを選択する可能性がある。将来について考える際、日々刻々と変化する情勢を目の当たりにすることによって引き起こされるモチベーションから進路を切り開こうとする活力を得ている一方で、自国への郷愁を抱きつつも国内情勢により帰国が困難であるという無力感を感じることもある。[D]

- ⑯-3. 他の選択肢がなくなり不可避免的な就職が必要になった場合、自身の年齢により就職活動に支障が出るのではないかという不安を感じることもある。[D]

- ⑯-4. 長期留学中、自身の選択した進路実現の準備時期にある留學生は複

数回の受験機会があるというスケジュールの把握による不安の軽減により希望する進路を実現する心理的重圧（プレッシャー）の回避が図れる。

[B]

自国でのコミュニティを離脱しての長期留学においては、日本の留学先で学生生活を送りながら、進学か就職か、帰国するか日本に残るか他の国へ行くか、といった留学期間終了後の進路について検討し、行動することが求められる（⑩-1.）。⑫でも触れたように、留学生の自国の国内情勢がキャリアを考える上でも影響しており、国内情勢により帰国が難しいという状況はキャリア形成へのモチベーションとともに帰国が困難であるという無力感をもたらす要因ともなっている（⑩-2.）。また、留学生自身の年齢が日本での就職活動を困難にする要因になり得るととらえられることもある（⑩-3.）が、⑩-4.のようにスケジュールの把握によりキャリア形成に対する不安が軽減されることもある。

上記のように、留学生は長期間の待機期間を経て漸く渡日を果たした後も、日本で様々な困難点に直面しており、メンタルヘルスの回復や維持のための行動を要した。

⑪ 【メンタルヘルスケア】

⑪-1. ストレスに対し、母語や使用言語を共有するグループでのストレス解消が図られる。そこでは、口に出して表現することによるいらだちの解消が行われることがある。[C]

⑪-2. バックグラウンドが類似した人物との関係構築によって気分転換が図られることがあるが、一方で面会することが困難な自国の家族と気軽に会うことができる友人の家族との比較に至ることがある。[C]

⑪-3. 留学前に関係を構築した友人とのコミュニケーションによる気分転換を図る上で、留学開始のタイミングの差異による関係の変化が生じることがコミュニケーションに影響を与えることがある。[D]

⑪-4. 年齢や経験を重ねることによる精神面での成長に加え、意識的に健康維持の方法を模索・実践することにより、心身の健康の向上の実感が

得られることがある。[A]

- ⑩-5. メンタルヘルス維持・向上のための具体的な行動としてアフターセッション（肯定的な思い込みの創出）の活用を通し、目標を意識することによるモチベーションの向上が図られることがある。[A]
- ⑩-6. メンタルヘルス維持・向上に対する問題意識と自発的行動を通し、アフターセッションと言語の学習法の共通点を見出すことがある。[A]
- ⑩-7. 留学生は気分転換をし、思考の制限を図るという能動的戦略を有しているが、この戦略はまとまった時間が必要な気分転換であり、多忙な現状では実施困難な戦略となり得る。[D]
- ⑩-8. 待機期間の膠着状態からの急激な展開により、留学生は渡日後、心理的鋭敏さを欠いた状況に陥ることがある。複数回留学を経験したことによって渡日手続きの負担の軽減が図られていた一方、心理的負担の軽減を図るための防衛的機能を働かせることで心理面でのコントロールがなされていた可能性がある。[B]
- ⑩-9. 留学生は治療と学業の両立にあたる上で、休息の時間の不足により多忙な状況で体調に配慮することの困難さを感じることもある。[D]
- ⑩-10. 渡日後にバーンアウト（燃え尽き症候群）による集中力の低下を受け、集中力の不足と時間の制約による趣味への取り組み方の変容が生じることがある。またその変容に対し、回復のための内省の必要性を感じる可能性がある。[D]
- ⑩-11. 留学生は自身のメンタルヘルスが阻害された経験から、メンタルヘルス不調の要因や治療法について周囲の人の意識が低いと考え、メンタルヘルスの不調に苦しんでいる人に対してはメンタルヘルス不調を経験している当事者の助言が有効であると捉えることがある。[D]

渡日後の困難点に直面することによって生じたストレスやメンタルヘルスの不調に対し、留学生は⑩-1、⑩-2.のように背景が類似した人物に気持ちを共有することがあったが、他者と自身との比較や、関係の変化によるコミュニケーションへの影響が生じた。一方で、留学生自身でメンタルヘルスの維持・向上を図る

こともあり (⑩-4.、5.) そこで言語の学習法との共通点を見出すこともあった。また、メンタルヘルスの阻害要因に目を向けるのではなく、意図的に何かに没頭することで思考の制限を図ること (⑩-7.) や、無意識のうちに心理的鋭敏さを欠いた状況を作り出して心理的負担の軽減を図っていると見られるケース (⑩-8.) もあった。

一方で、それまでに用いていたメンタルヘルスの維持・回復のための方略があったとしても、⑩-7. や⑩-9. のような時間的制約や、⑩-10. のような個人の内面での変容に伴い、方略を活用できない場合もある。このような方略が活用できず、メンタルヘル스에不調を来した経験等から、留学生 D はメンタルヘル스에不調を経験した当事者の助言が有効であると考えに至っていた (⑩-11.)。

留学生 D に関しては、待機期間からメンタルヘル스에支障を来し、渡日後に精神疾患の治療を受けている。以下、研究協力者間で共通性が見られる理論ではないが、留学生 D が渡日後にどのように回復を図ったかについて検討する。

⑩ 【精神疾患の診断と治療】

⑩-1. 留学生は大学進学後の一人暮らしの期間の長さによって生じた留学前の待機期間における実家の居心地の悪さを感じながら、新型コロナウイルス感染への不安や高齢の家族への配慮に負担を感じていたことから診療の機会を得ることが難しい状況に陥る。さらに、長期間に渡り自国での投薬を伴わない内省を中心とした治療を受けていたことが、診療を受けるのが遅くなり精神疾患を発症するという背景になり得る。[D]

⑩-2. 渡日前から不安定な心理状態を経験していた留学生は、渡日後に感じた体調の違和感がきっかけで類似した病状を抱える友人に相談し、自国の医師によるオンライン治療を受け、そこで得られた診断をもとに学内の健康管理機関での受診と薬剤の処方に至る。自国では未経験の投薬治療であったが、投薬治療の効果のなさを感じる。[D]

⑩-3. 最も強くメンタルヘル스에不調を経験した留学生は、日本にある専門医療機関への通院に至る。自国のコミュニティとのつながりのある医師から診察を受けることができ、自国の医師からの申し送りの反映も可

能なことは、医師への信頼感と相談のしやすさにつながる。[D]

- ⑬-4. 遠方への通院のための金銭的負担と時間の確保の必要性は生じているものの、留学先の近辺で受診可能な医療への不満を感じたことや、同じ医師のもとで治療を受けている複数の同国出身者がいることが通院の継続の支えとなり得る。[D]

待機期間から留学生 D は心理面での負担を感じていたが、診察を受けることが遅れ (⑬-1.)、渡日後に投薬治療 (⑬-2.) や通院を開始した (⑬-3.)。日本で担当する医師が自国のコミュニティとつながりのある医師であり (⑬-3.)、通院の負担が生じているものの、留学先の近辺での医療への不満や同じ医療機関に通院する同国出身者の存在が通院継続の支えとなっていた (⑬-4.)。

5. おわりに

本稿ではコロナ禍を受けて渡日延期を経験した 4 名の研究協力者の留学生の語りをもとに、SCAT で得られた理論を待機期間と渡日直後に分けて考察を加えた。

まず、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、先行きがわからない状況に置かれた留学生は渡日後の隔離期間のための費用の準備が大きな困難点として捉えられていた。さらに、渡日までの待機期間中に生活を共にする家族や友人は、長期に渡る待機期間で阻害されたメンタルヘルスを維持・回復させる存在にも、メンタルヘルスを阻害させる要因の一つにもなり得ることが明らかになった。同様に、待機期間に就労していた留学生は就労から渡日まで待機期間を継続するモチベーションを得ることもある一方で、就労により待機期間の長期化や退職時のトラブルが生じることもあった。

留学に関する情報が限られている中、留学生は留学予定者のコミュニティに参加することにより、情報や感情共有の機会を得ていた。一方で、SNS のコミュニティで接した多様な情報や発言により、混乱や不安が強まることもあった。このようなコミュニティ等から限られた情報が得られたとしても、流動的な状況下での情報の不足は依然として留学生にとっての困難点として受け止められ、留学がキャンセルになった場合の影響への懸念が生じたこと、さらには渡日後の隔離

期間のための金銭的な自己負担の可能性がメンタルヘルスを阻害する要因となっていた。このような状況に対し、留学生は自ら心理的安定を図るための行動をとっていたが、家族や友人、オンライン授業を通した日本の教員に対して抱いた印象がメンタルヘルスの回復と維持に寄与することもあった。

渡日後、留学生にとっては居住環境やライフライン確保に関する課題が生じるが、その際に相談の受け皿の活用やチューターのサポートが有効に作用した。また、オンライン授業等の学習についての困難点も生じたが、自国での待機期間と比較し、自身でコントロールできることによる充足感を感じる留学生もいた。

さらに、ホームシックの有無に関わらず、国内情勢等の影響を受けて一時帰国が難しい状況での家族の面会が課題となった。留学後の人間関係では、過去に複数回の留学を経験していた場合、過去のネットワークの活用が図られることもあった。留学生によっては母語や使用言語が共通するコミュニティに参加し、コミュニティの醸成を感じたことを関係構築の熱意につなげた一方で、母語や自国の文化とは一定の距離感を保とうとする留学生もいた。母語や使用言語の共通するコミュニティでは、ストレスを口に出すことでメンタルヘルスの維持や回復が図られていたことが窺われるが、長期留学中の留学生にとっては、留学期間終了後のキャリアをどう形成するかが大きな課題となっていた。

様々な困難点に直面する中、留学生は背景が類似した人物に気持ちを共有したり、留学生自身でメンタルヘルスの維持・向上の方略を模索し、実践したり、もしくは思考の制限を図ったりすることで対処していた。しかし、時間的制約や個人の内面の変容により、それまでに用いていた方略が活用できなくなっている留学生もいた。また本稿では、メンタルヘルスが阻害されたことにより精神疾患を抱えることになった留学生についても触れた。

本稿では渡日延期を経験した4名の留学生の語りについて SCAT を用いて分析し、得られた理論について検討した。その結果、研究協力者が直面した困難点が多様であることが明らかになり、それぞれに待機期間と渡日後にメンタルヘルスの維持・向上を図っていたことが示された。SCAT を用いた分析により、下村(2023)では限定的な扱いとなった無意識的・潜在的事項についても検討することができたものの、本稿では先行研究で扱われている既存の理論を含めた検討に

至らなかった。また、留学期間終了後のキャリアプランにおいて渡日延期の経験はどのように作用しているのか等について探るためにも、長期的に調査を続ける必要があると感じている。新型コロナウイルスの感染拡大の影響だけではなく、今後様々な事情で渡日に影響が出た留学生が日本で充実した留学生活を送るためのサポートについて考える上で役立てることができればと思う。

＜参考文献＞

- 江原宏、伊藤香純、緒方一夫、山内章（2021）「コロナ禍における大学教育、留学生受入等に関する大学の対応や課題についてのアンケート」『農学国際協力』19, 44-50
- 大谷尚（2019）『質的研究の考え方 研究方法論から SCAT による分析まで』名古屋大学出版会
- 岸田由美、陸晗子、薛芸（2022）「コロナ禍における留学生の経験と困難—金沢大学留学生を対象としたアンケート調査の結果から—」『金沢大学国際機構紀要』4, 75-91
- 佐古恵里香（2022）「コロナ禍における日本語学習者の現状と課題に関する一考察」『国際言語文化学会日本学研究』7, 91-105
- 下村朱有美（2023）「コロナ禍で渡日延期を余儀なくされた留学生はどのように渡日を待っていたのか—複線径路等至性モデルによる分析の試み—」第13回国際日本語教育・日本研究シンポジウム「つながる多様性、広がる可能性」香港日本語教育研究会 発表資料
- 「(時時刻刻) 水際、押し切られ転換 世論か経済課、揺れた首相」朝日新聞クロスサーチ（2022年2月18日）<https://xsearch.asahi.com/kiji/detail/?1699838152735>（2023年11月13日最終閲覧）
- 「コロナ禍における待機留学生と日本語教育機関の現状について」日本語教育機関関係6団体（2022年3月4日）<https://www.nisshinkyo.org/news/pdf/covid19/20220307covid13.pdf>（2023年11月15日最終閲覧）

Challenges Faced by International Students with Delayed Arrival: A Focus on the Waiting Period and Arrival Phase

SHIMOMURA Ayumi

This article examines the experiences of international students who delayed their arrival in Japan due to the effects of COVID-19. The study focuses on the challenges encountered by these students during the waiting period in their home countries and upon their arrival in Japan. All four participants in the survey were international students from Eastern Europe enrolled in higher education institutions in Japan at the time of the study. Employing SCAT (Steps for Coding and Theorization), I analyzed participants' narratives from their initial encounters with the Japanese language to the survey period, emphasizing pre- and post-arrival circumstances. The findings reveal that each participant faced situations inducing anxiety or dissatisfaction during the waiting period. Each student adopted individual coping mechanisms until they eventually arrived in Japan. In some cases, maintaining motivation was facilitated by employment opportunities during the waiting period and online classes at the study abroad destination. While some international students embraced new challenges upon arriving in Japan, others faced a decline in mental health, requiring long-term treatment. This paper delves into the behavioral and emotional aspects of facing difficulties and explores their underlying contextual factors.